

日本洋書協会会報

BULLETIN OF JAPAN ASSOCIATION
OF INTERNATIONAL PUBLICATIONS

目次

- 委員長会議／委員会報告1
- フランクフルト・ブックフェア(2)2
- フランクフルト・ブックフェア(3)3

委員長会議

日時：2008年11月20日（木）

1. 総務委員会

上半期の予算はほぼ予算通りに推移しているが、経費削減に協力をお願いしたい。

SGIの件は先ず総務グループを立ち上げ、年度内に1回目の会合を行う。

2. 会報・広報委員会

会報の電子化等の討議は時期をみて行う。

会報広告の出稿社のうち洋販、医学書院が抜けたので今後は出版社会の会員にお願いする。

セミナー・見学会は総務委員会案を検討する。

3. 事業委員会

今後の予定：丸善「そと市」への出展打診があ

った。今までのセール出展社の意見をまとめ対応する。

4. ホームページ・ダイレクトリー委員会

2009年版ダイレクトリー：「うちの会社」欄を増やす。また広告を増やしたいので協力をお願いする。フランクフルトBFでの配布について、各社の利用しているフォワダーで現地に運び配布された

5. 文化厚生委員会

行事の確認：新年賀詞交歓会（1月9日）、麻雀大会（2月）総会（5月22日）

新設されたボーリングが好評なので他の競技も試したらどうか（ダーツなど）

委員会報告 <文化厚生委員会>

第4回 ボウリング大会

2008年11月11日（火）

会 場：東京ドームボウリングセンター

参加者：26名（9社） 男性17名 女性9名

競 技：2Gのトータルピン（女性は20ピン/ゲームのハンディキャップあり）

上位の成績は下記の通り

順位	氏名（社名）	総得点	1G	2G
優勝	鶴 竜次（東亜ブック）	325	148	177
準優勝	井上昌哉（大洋交易）	309	180	129
3位	石渡 昇（阪神エアカーゴ）	306	150	156
4位	柿沼大輔（ユサコ）	286	133	153
5位	山中玄致（ユサコ）	284	167	117
6位	西山幸児（西山洋書）	284	104	180
7位	植原英男（日本出版貿易）	280	180	100
8位	渡部 純（東京ブックランド）	278	102	136

9位 村上加成子（ユサコ） 273 120 113

10位 寺尾雅人（日本出版貿易） 269 134 135

ハイスコアー男性／G

植原英男・井上昌哉・西山幸児 180

ハイスコアー女性／G 渡部 純 136

当日の写真は協会ホームページ www.jaip.jp の

「お知らせ」→「同好会だより」にあります。

次回は2009年3月に開催予定です。

フランクフルト・ブックフェア (2)

世界最大規模のこの国際書籍フェアに出席するようになって、何年になるのか？今年も、ブースに向かう初日には、いつもの情感と新たな期待感が複雑に入り混じり、けだるい体に活力を与える。ここに、多くの参加者とコンテンツがそろえば、それなりに新たなドラマがまた展開する。

われわれの活動分野である医学系出展は、主に Hall4.2 (通称 STMHall) と米国・英国出版社および医科協会などが出展している Hall8.0 が中心である。この両館は、室内通路でつながってはいるものの歩いて 5 分ほど離れており、このような館がそれぞれ Hall10 までであるということは、フェア全体の規模がいかに大きいかを物語っている。そして、この立地条件のもとで、いかに効率よくそれぞれのアポを Hall ごとに集中してとるかが、事前の重要課題の一つとなる。幸いに、今回もそれぞれのホールごとにまとまってアポがとれ、比較的効率よく訪問できそうではまずは一安心である。われわれの交渉内容は、医学翻訳関係と洋書籍・洋雑誌輸入そしてファーマビジネスと多彩に組まれ、主要な 4 日間はほぼ埋まっている。かろうじて 30 分設けた昼食時間は、アポにずれがなく運がよければ、Hall のバーで簡単に食べることができるのだが、それもあまり期待はできない。さあ、舞台は整った。いざ出陣である！

Hall4.2 (第 4 館の 2 階フロア) は、いつものとおり男女ともスーツに近い服装を着用し、アカデミックな色が濃く独特の雰囲気醸し出している。当然、一般客は少ない。それに比べ、一般書展示ホールや地元のドイツ書籍展示ホールは、一般客もかなり多く入り、東京ブックフェアのように常に賑やかで盛況に見える。また、日本の一般書出版社等が集合している Hall6.0 については、相変わらず日本のマンガを中心とした版權交渉で、各国のそれに携わるトレーダーで絶えず人だかりである。このように、それぞれの分野で特徴を生かした出展模様の中で、トレーダーおよび一般参加者が入り混じり、各ホールで祭典が行われている。

今回、STMHall で気がついたことは、近年、特に米国市場でオンラインジャーナルを中心としたコンテンツが急激に市場を伸ばし拡大しているわけだが、これらのオンライン・データベースの製作会社まで、ブースを持つようになってきたことである。このような現実を目の当たりにみると、日本市場も米国のように近い将来のコンテンツ提供の方向性を、出版社として検討・準備しておく必要が求められていると感じざるを得ない。ちなみに、この Hall での日本からの出展社は、販売で丸善、紀伊國屋、版元では医学書院、培風館、南江堂が常連である。

一日のアポが終わり、夕方からといえば、主要な取引先を招待した夕食会や他社主催のパーティーの出席など、連日連夜の

付き合いがある。大手学術系出版社のパーティーは、以前よりも地味傾向にあるが、各ブースでワインパーティーを催すのは常である。したがって、おのずと同日に何件かを掛け持ちをすることはよくあり、確かに体力勝負といえなくもない。

昨年フェア中に決行された S-Bahn のストライキは、われわれの移動を妨げ、宿泊先の空港ホテルから会場までタクシーを要した記憶があるが、今年は幸いそれも回避され、普段どおりの電車通勤に戻った。とはいえ、電車がなかなか時間どおりに来ないのは、やはりドイツなのか。

主催者によると、今年は 100 カ国以上から、7,000 以上の出版社が集い、期間中の入場者数は合計 299,112 人で、昨年の 5.6 % 増、そのうち 186,240 人はトレードビジターで、昨年の 182,668 人より 3,572 名増とのこと。この増加は、従来のプリント版のみならず、電子版・オンライン版・データベースなどの広い情報伝達が、その要因の一つとして考えられるであろう。これらの情報手段も、すでに“出版”として国際的に位置づけられているのかもしれない。

今年はフランクフルト・ブックフェア誕生 60 周年記念ということで、最終日前日の土曜日の夕方に、出展者を中心に盛大なパーティーが催された。あいにく、私は都合がつかず出席できなかったが、さまざまな催しが繰り広げられたと聞いている。60 周年記念ということは、「第 1 回国際見本市」は当然 1948 年頃に開催されたと推測されるわけだが、いかに多くの歴史を刻んできたビッグイベントであるかをあらためて感じさせられる。

毎年、このブックフェアでは、Guest of Honor と称して招待される国がある。今年の招待国は、トルコであった。トルコの企業は、活発にさまざまなイベントを展開していたようであるが、わが社の業種とは異なっているのと時間の関係もあり、残念ながら見る機会はなかった。ちなみに 2009 年の招待国は、現在躍進中の中国とのことである。この招待をきっかけに、今後中国が版權問題等についてさらに真剣に取り組み、発展国レベルになることを期待してやまない。

最後に、毎年参加して思うことは、自分を取り巻く出版業界が、今後どのような方向に行くのか？将来の適切な出版情報の伝達は、いかなるものか？今後に求められる医学情報とは、どのような形態なのか？など、常に考えさせられるイベントだということである。

(株南江堂 青柳三樹男)



フランクフルト・ブックフェア (3)

今年は海外刊行物の仕入を担当して8年目にして、5回目のフランクフルト・ブックフェア訪問だった。10月中旬のドイツにも関わらず、日中は20度を越える陽気で、朝夕多少冷え込んでもコートは特に必要ないほどであった。

今年は「60周年」としてさまざまなイベントが行われ、この展示会の歴史と役割について振り返るよい機会であった。

フランクフルト・ブックフェアは第二次大戦後ドイツが東西に二分された後、1949年に市内の「聖パウロ教会」で第1回が開催された。当時は西ドイツの205社が参加し、入場者数9046名という小規模ながら、出版・書店関係者が親睦を深める場、展示見本をもとに受発注をする場として認知され、翌年からは外国出版社が100社ほど参加し、1951年には現在の見本市会場へと移転し、国際ブックフェアとして歩み始めた。現在ではブックフェアとしての性格も変わり、著作権交渉や国際共同出版など国際間の商談の場、情報交換の場として出版マーケットに大きな役割を果たしている。1993年からは、マルチメディアにスポットを当てた「電子メディア・グループ」と言う分野を新設し、2000年には「コミックセンター」を立ち上げ、日本のポップカルチャーに触発されたサブカルチャーの世界的な拡大に滑車をかけた。

今回は国際的な金融不安のあおりを受けたせいか、参加国100カ国（前年は108カ国、以下カッコ内は前年数値）、ドイツ出版社3,337社（3,358社）、海外出版社4,036社（4,090社）と、前年をやや下回る出版社数ではあった。実際に歩いてみると、去年までスタンドがあった場所が通路となっていることがあった。とはいえ、東京ドームの4倍近い会場面積があり、会場内をシャトルバスが縦横無尽に走る広大な様はまさに国際的と呼ぶにふさわしい展示会である。

来場者数は過去最高の299,112人（2836,293人）で、1日当たりの数が78,218人という最高潮に達した18日は、ドイツ出版社が入っている3号館にいと、人ごみで前に進めないほどであった。

弊社は4号館2階にスタンドを持ち、本年は出版版權担当：4名、海外仕入担当：5名で活動した。同じフロアには学術情報を扱う海外出版社のほか、日本からは南江堂さん、医学書院さん、紀伊国屋さん等がスタンドを持っている（ちなみに、本年出展の日本企業は全部で34社）。土曜日までの間に一人当たり30—40件ほどのアポイントが入り、1時間—30分刻みで面談をこなし、昼食が取れない、休み時間は会場間の移動、夜は出版社主催のパーティーへ参加というハードなスケジュールとなる。

この状況は面談相手の出版社も同様で、挨拶もまずは「忙しいですね」で始まる。そんなハードな日程でもなんとかこなせることが出来るのは、普段メールでやり取りしている相手と直接話すことで誤解が解くことができ、面談を持ち、パートナー意識ができ

るからではないだろうか。ビジネスの有効性を語るには時間が短すぎ、という意見もあるものの、取引先のほとんどと短期間にまとめて情報交換が可能という魅力に尽きる。

近年よく言われていることではあるものの、多くの出版社や取次でデジタルコンテンツを有効に利用し、商品やサービスに生かそうとする動きがあり、米国市場に続き他市場でも増えるのではという期待感を持って先取り対応している印象を今回強く受けた。このような変化が続き、いずれは書籍雑誌といった冊子体よりはデータの販売が中心となると、出版物の展示会も媒体の変化を受けて「フランクフルト・データフェア」となってしまうのでは、と考えるのは心配しすぎだろうか。

面談相手の出版社は、一般公開日の土曜前に「一般公開日はtouristが多く私たちのaudienceではない」として担当者が帰る場合が多い。一方ドイツ出版社の多くは一般公開日に著者サイン会やパネルディスカッションを行うため、一般市民が無料配布物を入れるためのガラガラかばんを持って大挙して殺到する事になるのである。

フランクフルト・ブックフェアはビジネスの場だけではなく、文化交流の場でもあるとされ、毎年テーマが変わる。本年のテーマ国はトルコ。複数の会場で古書、トルコ書籍ばかりでなく、絨毯、革製品等雑貨、食品といったトルコ物産コーナーまで設けられ、ドイツ在住と思しきトルコ人が多数鑑賞していた。

また、期間中は“German Cosplay Championship”なるコスプレ大会が開かれ、大広場に行くと秋葉原で何かの催しがあると勘違いするほどの人数とクオリティーでさまざまなキャラクターに扮した人々がたむろしている。ドイツ人によれば「最近の若い人はマンガばかり見て本を読まない」とのこと。日本=マンガ=本を読まない、と短絡されないよう、願わくは日本のマンガを読むドイツの若者が読書好きになりますように。

最終日前の18日夕方には、“Exhibitor's Night”と称して60周年を祝う無料のパーティーがメッセ主催で出版社を招いて行われた。事前に申し込んでいたものの予想以上の盛況のため、チケットの入手が困難であった。ブックフェアの歴史をたどったスクリーンが表示され、時代の変遷を皆で体感したところでショーツームとなり、ドレープダンス（カーテンに体を巻きつけて上がったりがったりする）あり、歌ありの賑わしだった。食べ物品の数に限定はあるけれど食べ放題、飲み放題で、いつしかトルコ人とドイツ人がダンスで盛り上りを見せていた。「ここでもトルコか!」と思いつつ、ドイツ社会に着実に根を張りつつあるトルコ人達の活力と、ユーロ圏に取り込もうとするヨーロッパ社会の懐の深さを垣間見た気がした。

さて、来年は10月14日—18日に開かれ、テーマ国は中国。参加企業はどれも多忙なるも、よく見ると実は奥深いブックフェアを楽しんでもらいたい。会場で京劇が見られてしかも中華街のような食事ができたら最高だ。

（丸善株影山 伊和男）



Physicians' Desk Reference, 2009: Library/Hospital Edition. 63rd Edition.

米医薬品便覧 2009 : 病院・図書館版
第 63 版

Physicians have turned to PDR® for the latest word on prescription drugs for over 60 years! Today, PDR® is considered the standard prescription drug reference and can be found in virtually every physician's office, hospital, and pharmacy in the U.S. In fact, nine out of ten doctors consider PDR their most important drug reference source. The new edition is over 3,000 pages our most comprehensive edition ever! New format allows dramatically improved readability and easier access to the information.

You'll find the most complete data on more than 4,000 drugs by brand and generic name (both in the same convenient index), manufacturer and product category. Your PDR provides usage information and warnings, drug interactions, plus more than 2,000 full-size, full-color photos cross-referenced to the drug. You will also find:

Phonetic spelling

A key to controlled substances

Dosages

Clinical pharmacology

FDA use-in-pregnancy ratings

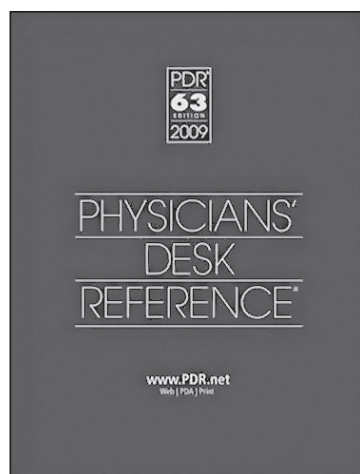
Adverse reactions

Contraindications

Pediatric use

And all other FDA-required information

好評発売中！



Publisher: Thomson Reuters

ISBN 13: 978-1-56363-703-2

2008 Hardback 3314 Pages ¥11,616 (本体 ¥10,630)

日本総代理店



United Publishers Services Limited

〒140-0002 東京都品川区東品川 1-32-5 Phone (03)5479-7251 Fax (03)5479-7282

日本洋書協会会報 vol.42 No.12(通算 495 号) 発行日 2008 年 12 月 25 日 編集者 正田 実

発行所 日本洋書協会 〒140-0002 東京都品川区東品川 1-32-5 U.P.S. 内 TEL 03-5479-7269 FAX 03-5479-7307

URL: <http://www.jaip.jp> E-mail: jaip@poppy.ocn.ne.jp